Osaka University Knowledge Archive

Title	＜紹介＞蜂矢真郷著『国語派生語の語構成論的研究』
Author(s)	是澤, 範三
Citation	語文. 2010, 95, p. 59-62
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/69163
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

蜂矢真郷著『国語派生語の語構成論的研究』

是　澤　範　三

本書は、平成二十二年三月をもって本学を御退休された氏の「語構成論的研究」第二弾[1]である。「あとがき」には次のようにある。

本書は、前書『国語重複語の語構成論的研究』に続き、国語の上代および中古の用例を中心に、必要のあるものについては時代を下る用例をも合わせ、カ（・ガ）行に関係する接尾辞を伴う派生語を中心に、語構成論的に研究したものである。

目次は、以下のとおりである。

はしがき
第一編　動　詞　―カス型動詞―
第一章　カス型動詞の構成（一）
第二章　カス型動詞の構成（二）
補　章　日本霊異記訓釈「波リ天」考
第二編　形容動詞語幹　―カ（・ヤカ・ラカ）型語幹―
第一章　カ型語幹の構成
第二章　ヤカ型語幹の構成
第三章　ラカ型語幹の構成
第四章　カ（・ヤカ・ラカ）型語幹の語基
第三編　形容動詞語幹と動詞
―カ（・ヤカ・ラカ）型語幹とク（・グ）型動詞―
第一章　～カ（・ヤカ・ラカ）と～ク（・グ）
第二章　～ヤク（・ヤグ）と～ラク（・ラグ）
第四編　形　容　詞　―ケシ型形容詞―
第一章　ケシ型形容詞の構成（一）
第二章　ケシ型形容詞の構成（二）
第三章　～ケサと～カサ
第四章　～カシイ・～ケシイ・～カイ
第五編　清　濁　―カ行・ガ行の清濁―
第一章　ク（・グ）型動詞の清濁
第二章　～キと～ギ
あとがき
索　引（語句索引・事項索引）

上記の構成については、各編の内容とともに要を得た解説が「あとがき」に書かれており、それが本書を読む指針となる。したがって、本書の大要を知るには、まず「あとがき」を読まれることをお勧めする。

「あとがき」にあがる既発表論文をみれば、一九八一年から二〇〇一年までの十九本があげられているが、「新たに書き加えた箇所やかなりの修正を施した箇所もあるので、ここに示す本書との関係はおおよそのものにとどまる」という。

本書における「派生語」とは、阪倉篤義『語構成の研究』（角

川書店、一九六六）における「複合」（本来自立の用法を有する二つ以上の単語またはこれに準ずる言語単位が結合すること）と「派生」（本来自立の用法を有する一つの単語に、一つ以上の非自立的要素、いわゆる接辞が接合すること）の定義に基づくが、前書で氏が改めてとらえられた複合語・派生語の構成要素である三要素、すなわち（イ）独立的要素（ロ）準独立的要素（ハ）非独立的要素（いわゆる接辞）でいえば、派生語は（イ）に（ハ）が「接合」したもの、および（ロ）に（ハ）が「接合」したものを、あわせて派生語とされる。

本書を紹介するにおよび、まずは本書の導入となる第一編第一章を押さえることとする。本章カス型動詞の考察が、以降第三編までの考察のプロトタイプとなっているからである。

第一章で取り上げられる「カス型動詞」の考察は、次のようなものである。たとえば、トドロカスとオビヤカスは語尾がカスとなる点でカス型動詞であるが、その語構成は異なる。すなわち、トドロカスは、動詞トドロクに接尾辞スがついたものであるが、オビヤカスは動詞オビユに接尾辞カスがついたものである。このカスを、阪倉氏は異分析による肥大した接尾辞とされ、吉田金彦氏はク語尾動詞に「す」の附いた本来型に対し、いわゆる類推作用で起こった応用型と仮称される。これらを承け蜂矢氏はカス型動詞の内、〜クに当たる動詞の例が見られるものを本来型であることの裏付けとして、上代の本来型の例アク—アカス・ハラク—ハララカス・ユラク—ユラカス・ワク—ワカス・ツク—ツカス・ハルク—ハルカス・ウゴク—ウゴカス・ナビク—ナビカスを挙げられる。一方、上代における応用型（動詞＋カス）の確例は見えないとして、中古・中世の例を列挙・網羅される。応用型はさらに代入型（準代入型）、特殊代入型、直接型（準直接型）に分類される。例えば、①オビユ—②オビヤス—③オビヤカス（①動詞—②動詞＋ス—③動詞＋カス）のように、②の例を持つものを、「スをカスに代えることをスにカスを代入するようにとらえ」て代入型と呼び、②の例を持たない、つまり、代入の過程を経ないものを直接型と呼ばれる。分類作業は文献を博捜して得られた用例を、逐一検討のもとになされる。「〜に準じてとらえられる」という表現、および「準〜型」さらには「再応用型」「再々応用型」といった分類枠があるのも、その分析の緻密さから生じた結果であり、そこからカス型動詞の形成過程（本来型〉代入型〉直接型）が導き出される。

このように示されたカス型動詞の構成は、形容動詞語幹（ヤカ型語幹・ラカ型語幹）でも近似することから、これをプロトタイプとして考察は第二編・第三編へと展開する。

第四編（形容詞—ケシ型形容詞—）は、〜カが接尾辞シを伴うととらえられる点で、第三編までの母音交替によるものとは異なる。とはいえ、ケシ型形容詞（シヅケシ(静)、ニコヤケシ(婉)、アキラケシ(明)など）の多くがカ（・ヤカ・ラカ）型語幹との対応を持つことから、そのような対応を持つか否かで一次的ケシ型と二次的ケシ型とに分類され、考察される。

さて、派生語の研究でありながら、一見異彩を放つのが第五編（清濁―カ行・ガ行の清濁―）である。歴史的に見ると、「キック・キヅク・キツグ（城・築）」や「イザナキ」「イザナギ」など、濁音の位置が一定しない語が見られる。そもそも古代における清濁および濁音化の問題は、連濁やアクセントの型（高起式・低起式）の問題とも絡んで、実は語構成・語形成さらには類推・異分析などの複雑な要因を孕む。にもかかわらず、その検討に必要な清濁およびアクセントの知られる信頼できる資料には限界がある。そこでものさしとされるのが「金田一法則」[2]と、「濁音共存忌避の法則」ないし「濁音並列忌避の法則」と氏が称される法則である。これらの法則を尺度として、～クから～グへ濁音化する動詞群（アフグ・イソグ・カツグ・サワグ・ヌグなど）を選別し、その理由を「形容詞連用形やク語法のものなどに対して動詞であることを明示する必要性」にあるとされる。一方、名詞（動詞連用形）である～キが～ギへ濁音化する「理由は見出だせない」とされるが、「～クから～グへの濁音化が多く四段動詞に見えるところからすれば」として、その延長上に位置づけられる。結果としてカ行・ガ行に関係する接尾辞の派生現象が、アクセントと清濁の観点から、ここに記述される。

本書は恩師阪倉篤義氏が先鞭をつけた語構成の問題のうち、派生語の構成として不明瞭であった古代語の語群を、一貫した分類方法により逐一解明していったものであり、カ（・ガ行）に関係する接尾辞を伴う派生語は、本書により整理されたといってよい。

氏の論文の魅力は、博捜し吟味された用例に基づく緻密な考察と論証、そして、上代、平安時代（初期・中期・後期院政期）、鎌倉時代、室町時代という時代区分の中に用例が配置され、国語語彙の語構成史・語形成史が記述されていくその過程にあろう。付言すると、本書での論証の記述をデス・マス調に置き換えれば、氏の講義での語り口とほぼ同じとなり、かつての講義風景を彷彿させて、なつかしい。

氏は「あとがき」に次のように述べる。

本書は、カ（・ガ）行に関係する接尾辞を伴う派生語を対象としていて、「はしがき」にもふれたように、接尾辞ヤ・ラなどを伴う派生語をむしろとり挙げるべきであるという問題がある。そして、接尾辞ヤ・ラなどを伴うものを前書第六編で接尾形状言と呼んだが、それを含む〝形状言〟をどのように考えるかという問題もある。それらの検討がどのようなまとまりを見せるかは、今後にかかっていると言わねばならない。

本書には編まれなかった重要な論文がまだ多数あり、それらが今後生み出される論文とどのように関係し、まとめられていくのか、これからも学ばせていただきたい。

注

（1）重複語を中心に考察した前書（一九九八年塙書房刊）は、同年、第十七回新村出賞を受賞した。

（2）金田一春彦（一九五三）「国語アクセント史の研究が何に役立つか」（『金田一博士古希記念言語民族論叢』三省堂）によれば、「ある語（のアクセント―是澤注）が高く始まるならば、その派生語・複合語もすべて高く始まり、ある語が低く始まるならば、その派生語もすべて低く始まる。」というもの。

付記

本書の素材ともいえる語句の数は、二十八頁に及ぶ語彙索引（語構成要素を含む）から数え上げると、約一四五〇語であった。古代語を研究するものにとっては貴重かつ興味深い lexicon であり、恩恵に浴したい。

（岩波書店、二〇一〇年三月、四四八頁、一三〇〇〇円）

（これさわ・のりみつ　京都精華大学講師）